



府 食 第 61号
平成25年1月31日

食品安全委員会委員長 熊谷 進 殿

調査・研究企画調整会議座長 佐藤 洋

平成25年度食品安全確保総合調査対象課題（案）について

標記について、平成25年1月23日に開催した第16回調査・研究企画調整会議において審議した結果、別添のとおり取りまとめましたので、報告いたします。

(別添)

平成25年度

食品安全確保総合調査課題（案）について

平成25年1月

食品安全委員会 調査・研究企画調整会議

平成25年度食品安全確保総合調査対象課題(案)

(別 添)

番号	調査課題	調査目的
1	<p>ビスフェノールAの食品健康影響評価に関する評価手法の調査及び情報収集・分析</p>	<p>平成20年に厚生労働省から食品健康影響評価(以下、「リスク評価」という。)が要請された器具・容器包装に係るビスフェノールA(BPA)については、平成22年7月の器具・容器包装専門調査会において、生殖発生毒性等に関するワーキンググループから「ビスフェノールA(BPA)に関する健康影響について 中間とりまとめ(以下、「中間とりまとめ」という。)」が報告され、BPAのリスク評価については中間とりまとめ時点での知見からは耐容一日摂取量(TDI)を設定することは困難であるが、低用量に関する新たな科学的知見が得られた時点で再度TDIについて検討するとされたところである。今般、国際的な評価状況の進展に伴い、低用量影響に関する評価手法について検討が展開されており、新しい科学的知見も蓄積されつつある。このため、本調査では、BPAのリスク評価の再開を検討するために、最新の評価手法の調査、中間とりまとめ以降に公表された文献等の収集及び既存文献を含めた整理・分析を行うことを目的とする。</p>

番号	調査課題	調査目的
2	動物用抗菌性物質の微生物学的影響についての調査	<p>動物用医薬品及び飼料添加物における抗菌性物質（以下「動物用抗菌性物質」という。）の食品健康影響評価については、毒性的影響のみならず、腸内細菌叢に対する微生物学的影響についても評価する必要がある。肥料・飼料等専門調査会においては、それぞれの影響を比較し食品健康影響評価を行っている。</p> <p>評価に必要なヒトの臨床由来腸内細菌における動物用抗菌性物質のMIC(最小発育阻止濃度)については、平成18年度に一部の動物用抗菌性物質について調査を実施し、その調査結果を、微生物学的影響評価のための基礎資料として用いているところである。</p> <p>しかしながら、現在諮問されている品目及び今後諮問が予定される品目で、ヒトの臨床由来腸内細菌におけるMICの調査が実施されていないものがあり、今後の評価に支障を来すおそれがある。</p> <p>そのため、今後食品健康影響評価を実施する予定の動物用抗菌性物質について、新たにヒトの臨床由来腸内細菌におけるMICを調査することとする。</p>

番号	調査課題	調査目的
3	畜水産食品における薬剤耐性菌の出現実態調査	<p>家畜等への抗菌性物質の使用に起因する薬剤耐性菌の食品健康影響評価をより科学的に実施するに当たり、畜水産食品等の薬剤耐性菌の出現に関する科学文献及び調査報告数が極めて少ないことから、畜水産食品等の薬剤耐性菌の出現状況を定量的に把握しておく必要がある。</p> <p>平成17年度には、畜水産食品における薬剤耐性菌について情報収集するとともに、薬剤耐性菌の出現状況を定量的に把握するためのプロトコルを作成した（平成17年度「畜水産食品における薬剤耐性菌の出現実態調査（プロトコル作成）」報告書）。</p> <p>このプロトコルに従い、平成18、19及び20年度に畜産食品（牛肉、豚肉、鶏肉）における薬剤耐性菌の出現状況を調査したが、カンピロバクターによる食中毒の原因食品としても頻度の高い鶏肉におけるカンピロバクターについては、平成18年度にのみ調査が行われている。また、牛肉及び豚肉におけるカンピロバクターについては、分離頻度が低いことがこれまでの知見から判明しているが、カンピロバクターによる食中毒の原因食品として重要な牛及び豚の肝臓における薬剤耐性菌の状況については知見が少ない。</p> <p>そのため、鶏肉、牛及び豚の肝臓における薬剤耐性カンピロバクターの調査を実施し、薬剤耐性菌の食品健康影響をより一層科学的に評価するための基礎資料とする。</p>